

テーマ1・医療と福祉、わたしの体験 「支える手を、つなぐ未来へ」

愛知県・光ヶ丘女子高等学校2年

杉田 遥香

私は、九十一歳になる祖母がいる。若々しく、いつも身なりに気を遣い、足腰もしつかりしていた。八十歳の時には、泊三日目のディズニー・リゾート旅行に出かけ、すべてのアトラクションを制覇するという、私達家族の中で“伝説”となつた人だった。

そんな祖母に変化が表れ始めたのは八年前。自宅のシャッターに車をぶつけ、免許の返納をしたころから少しずつもやがかかつていくように認知機能が低下していった。とっくに亡くなっている自分の両親を生きていると言つたり、自分は女学生でバレーボールを習つてゐるんだと言つてみたり。ただ、おかしいなと思う日もあればしゃんとしている日もあつたし、自宅で生活したいというのが祖母の一番の希望であつたので、祖母の生活は、近距離に住む私の両親が通いで支えていた。

しかし、二年前に祖母が倒れ救急で運ばれた時から状況は悪化の一途をたどつた。入院していることが理解できず点滴を引きちぎり着替えて部屋を出て行つてしまつ。退院後自宅に帰つた後は、両親は昼夜を問はず祖母の世話を奔走することになった。父は一日十数回とかかつてくる電話をとり続け、母は毎食分の食事を運ぶ。私は学校帰りに様子を見に通つ日々だつた。もう何年も、家族で外出もままならない日々だつたことを思い出す。我が家での旅行は『いつ何時祖母に何かあつても駆け付ける場所』が第一条件だつたのだ。

そして今年の五月一十六日。いつもと違つ時間にたまたま祖母の家に寄つた父が、テーブルの上で手つかずのお弁当を発見した。胸騒ぎがして奥の寝室に駆け込むとあおむけで倒れている祖母を発見したのだ。

二回目の救急搬送となつたことで、医師から、施設への入居を促された。一番の希望であった自宅での生活ができなくなつてしまつたことで

不安にさいなまれる祖母と、祖母の希望をかなえてあげられなくなつたことで、両親が祖母に対しても胸をつかまるくらい辛かつた。誰が悪いというわけでもないのに。そうして迎えた祖母の施設での生活。実は、思いがけず快適なスターを切つてはいる。帰りたいと言われるだろうと恐る恐る面会に行つた私達を笑顔で迎えてくれた祖母。「食事の時間だから行くわね」と私達の方を振り返ることもなくみんなと食堂へ行く祖母。私達は思わず顔を見合わせて笑つてしまつた。

今、その姿があるのは、施設のみなさんやケアマネージャー、訪問介護の方々の祖母に対する、そして家族である私達に対する大きな理解と本当に細やかな配慮があつたからに他ならない。入居前、施設の職員さんに言われた言葉がある。

「これまでご家族だけでよく頑張つて来られましたね。これからは私達が一緒です。お母様のこれから幸せをここにいる全員で考えていきましょう。」

そつ言られた瞬間、横にいた両親が泣きながら大きいくなづいていた。私もふと背中が軽くなつた気がした。

今、施設の方達は豊富な知識と経験を元に、祖母の生活のためにたくさん提案をしてくれる。そのすべては祖母が幸せと思えるように、毎日樂しいと思えるように、という思いにあふれている。そして両親や私にとっても、相談できる人達がいること、頼れる場所があることが、こんなにも心強いことだと感謝してもしきれない。

祖母は私に老いるとはどういうことかを身をもつて示してくれる。老いることは怖いことではない。誰かを頼つて生きることは悪いことではないのだ。

そして私は今、看護師になりたいという夢に向かつて走つてゐる途中だ。私もいつか、誰かを支えられる存在になりたい。支えるとは寄り添い、共に歩むこと。私はその姿を祖母から教わつた。